

無時無刻—いつ、いかなる時も—蘇笑柏(ス・シャオバイ)展

メディア内覧会：

2018年10月11日(木)3:00p.m.(受付：2:45 p.m.～)

兵庫県立美術館ギャラリー棟3階

※受付場所は1階ホワイエとなります。

※別紙連絡票によりお申込み下さい。

レセプション：

2018年10月12日(金) | 4:00 p.m.

兵庫県立美術館ギャラリー棟1階ホワイエ

会期：

2018年10月12日(金)から11月28日(水)

10:00 a.m. - 6:00 p.m. / 月曜日 休館

金・土曜日は8:00 p.m.まで。ただし10/19、20、26を除く。

*入場は閉館30分前まで

会場：

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目1-1

兵庫県立美術館ギャラリー棟3階

入場無料

主催：財団法人耿藝術文化基金会

共催：兵庫県立美術館

2018年10月12日より、1949年生まれの中国籍抽象美術家・蘇笑柏(ス・シャオバイ)の大型個展「無時無刻—いつ、いかなる時も—蘇笑柏展」が、初めて日本で開催されます。財団法人耿藝術文化基金会が主催する本展は、西日本最大級の規模を誇る兵庫県立美術館で、2018年10月12日(金)から11月28日(水)にかけて行われます。本展は、世界的建築家として知られる安藤忠雄氏が設計を手がけた、西日本最大級の規模を誇る兵庫県立美術館で開催します。未発表作25点のうち、半数近くが新作であり、中国の伝統的マテリアル「生漆」で描かれた《洒脱》(2017)、《拂水一夏》(2018)、《拂水一秋》(2018)、《拂水一冬》(2018)をメインに発表。またそのうちの大半は、2メートルに達する大作となります。

蘇は中国の歴史ある素材「生漆」を生かした実験的な制作方法を駆使しながら、アートという言葉をもってマテリアルと絵画との対話を引き出しています。時の積み重ねによって生まれたレイヤーとマチエールは、蘇の構想という下地の表れであり、“裏衣(衣を纏う)”や“脱胎(生まれ変わる)”といった創作のプロセスをも示しています。言い換えれば、物質たるものが自然の変化に順応するなかで、生成していくそのランダム性や自由を露わにしているのです。蘇は「抽象画のなかに丁寧に封じ込めてしまうものこそ、私が伝えたい内容である」と語っています。古代漆器の制作過程の一環、麻を用いた布着せという技法に深く魅了された蘇は、一層一層重ねいく特殊な工程を通して、色彩の原始的な様態を表し、物自体が持つイメージの質をもえぐり出していきます。それは材料に人為的な主観概念を付与した美学とは異なります。

本展のタイトル「無時無刻 (And there's nothing I can do)」とは、反芻し、温め、構想するといった

一連の創作プロセスを表わしています。作家にとって何かを制作するとは、単にアトリエの中で行われる営みではなく、また創作というのも、顔料をただ塗り重ね、仕上げていくことではありません。思考の熟成に要した長い歳月と、漆が持つ物質的特性をも内包しています。「私に出来ることは何もない、ありとあらゆる手を尽くした。いつ、いかなる時も、どんな時でも、私がクリエイティブしているのは、ただの一つの状態でしかない」と本人は言います。また、本展の展示空間設計は、かつて安藤忠雄建築研究所に勤めた、ノイズの豊田啓介氏によるものです。2014年、2016年のタイアップに続き、今回も兵庫県立美術館という空間のなかで、素材と対話するアートが繰り上げられることでしょう。

蘇笑柏(ス・シャオバイ)について

1949年中国の湖北省武漢市に生まれ。1985年、中央美術学院油絵研修コースで画技を修得。1987年、ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州が交付する奨学金を受け、国立デュッセルドルフ美術アカデミーの研究生を経て、マイスター課程で更なる研鑽を積んだ。蘇は生漆と絵画の間で対話を重ねながら、文化体験を超える自然な吐露へと絵を転換させていく。

蘇の作品は世界中の美術館、個人の收藏家によってコレクションされている。近年の主な展示に、「The Armory Show」(Piers 92 & 94・ニューヨーク・アメリカ・2018)、「Infinite Blue」(Brooklyn Museum・ニューヨーク・アメリカ・2018)、「The world is yours, as well as ours」(White Cube Mason's Yard・ロンドン・イギリス・2016)、「蘇笑柏個展」(Tina Keng Gallery・台北・台湾・2016/2014/2012)「絵画と存在」(Pearl Lam Galleries・香港・2014)、「蘇笑柏 Su Xiaobai」(Almine Rech Gallery・パリ・フランス・2014)、「大境—蘇笑柏芸術展」(国立台湾美術館・台中・台湾・2013)、「The Dynasty of Colours—Xiaobai Su Solo Exhibition」(Langen Foundation と ZDF の共催によるドイツ巡回展・2010)、「悟象化境：伝統的思惟を現代から再解釈する」(中国美術館・北京・中国・2009)、「考工記」(今日美術館・北京・中国・2008)、「大象無形」(上海美術館・上海・中国・2007)、「中国北京国際芸術ビエンナーレ」(北京・中国・2003)など。

各種プレス、取材のお問い合わせ先

① 兵庫県立美術館 営業・広報担当：
TEL. 078-262-0905 | FAX 078-262-0903

② 羅安琪 Angel Luo | Sutton (日本語対応不可)：
angel@suttonpr.com | +852 2528 0792

③ 藍鈺樺 Megan Lan | 耿藝術文化基金會 (日本語対応不可)：
megan@tinakenggallery.com | +886 911 666 949

※画像提供及び展覧会詳細情報については、②、③にお問い合わせください。

無時 無刻

いつ、いかなる時も ス シャオ バイ 蘇笑柏 展

And there's nothing I can do
Su Xiaobai Solo Exhibition

2018.10.12(金) - 11.28(水)

世界的建築家として知られる安藤忠雄氏が設計を手がけた兵庫県立美術館は、西日本最大級の規模を誇る。また、同館の養豊現館長は、長年にわたり磁州窯の研究に精を尽くし、中華圏の文化に対する造詣を極めたうえ、美術における開けた多元的な視野を持つ博識者だ。同じく安藤氏によるランゲン・ファンデーション(ドイツ)で、2010年に展覧会を果たした蘇笑柏は、日本で最新シリーズを発表すべく、時を経て縁ある兵庫県立美術館で「無時無刻—いつ、いかなる時も—蘇笑柏展」を開催する運びとなった。展示空間の設計は、かつて安藤忠雄建築研究所に勤め、現在はプロダクトから都市まで分野を横断した建築活動を行う、noiz(ノイズ)の豊田啓介氏によるもの。

1949年中国の湖北省武漢市に生まれた蘇笑柏は、中央美術学院油絵研修コースで画技を修得。1987年、ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州が交付する奨学金を受け、国立デュッセルドルフ美術アカデミーの研究生、マスター課程で更なる研鑽を積んだ。蘇笑柏は生漆と絵画の間で対話を重ねながら、文化体験を超える自然な吐露へと絵を転換させていく。それぞれの作品がみせる厚薄の対比、時の積み重ねが作り出すレイヤーとマチエール、緻密に描かれた絵の表面は、引き込まれる彫刻的な奥行きに満ち、恍惚に溢れ、神秘をも暗に示している。殻のような肌合い、たおやかな円弧状の縁、摩耗からなるヒビ模様など、これら全てはメディウム自身ももつ条件に依拠し、己の歴史

または個性をもった、いわば自立した存在である。蘇の作品はビジュアル言語や芸術という概念をもって、哲学から日常の普遍的なテーマを浮かび上がらせる。彼が手がけるアートは“実存”の体現であるがゆえに、その他のものは描いていない。

本展のタイトル“無時無刻”とは、作家の創作状態そのものを言い表している。蘇にとって何かをクリエイトするとは、ただアトリエの中で行われる営みではない。絵画制作とは、顔料を塗り重ね仕上げていくプロセスに留まらず、品や趣きを反芻し、温め、構想する時間をも含む。作画に一定の法則性などなく、多くの場合、作家は全身全霊をかけて仕事に取り組むまでだ。作品が最終的に行き着く先は、人力の成し得るところではなく、自然の流れに委ねるしかないのである。これに対し蘇笑柏は「物語はストーリーを欲する人に残してあげましょう。私は少しの光、平面の上に戯れる僅かな起伏と、若干の色彩、そして流動さえあれば十分なのです」と語っている。

The largest art organization in West Japan, Hyogo Prefectural Museum of Art is designed by world-famed architect Tadao Ando, and led by director Yutaka Mino, who is not only dedicated to lifelong research on China's Cizhou kiln, but also highly conversant with Chinese culture, with a broad, diverse perspective on global contemporary art. In a space specially designed by Keisuke Toyoda of Noiz Architects, who once apprenticed with Tadao

Ando, the Hyogo Museum presents *And there's nothing I can do*, a solo exhibition of Chinese artist Su Xiaobai.

Born in 1949 in Wuhan, China, Su Xiaobai studied painting at the Wuhan School of Arts and Crafts, the Wuhan Institute of Painting, and the Hubei Institute of Fine Arts before attending the Beijing Central Academy of Fine Arts. He was later awarded a German Cultural and Art scholarship to participate in the graduate program offered by the Düsseldorf Academy of Fine Arts in Germany in 1987.

The artist paints layers of vibrantly colored lacquer in a purely structural and balanced composition, rendering a three-dimensional momentum and vitality. The thick, imposing texture stimulates a curiosity within the viewer, while the integration of cultural and historical heritage permeates the expressively colored abstracts. Standing at the cross-cultural convergence of Eastern and Western civilizations, the artist embodies the reciprocal philosophies and assimilation of the new globalized world, at the same time maintaining his personal sense of reinvention.

Just as Director Mino lauds, “His works consisting of layer upon layer of lacquer filling large canvases speak to viewers, inviting them into a realm of profound tranquility and contemplation. We confidently anticipate Su Xiaobai will continue to carve out new aesthetic territory, producing challenging works of extraordinary impact in lacquer, a material superbly symbolic of Eastern culture.”

And there's nothing I can do revolves around the artist's creative state of being. For Su Xiaobai, art making doesn't occur simply in the studio; nor is it defined by the moment when he wields his paintbrush; art making encompasses the time it takes to conceive a work. Art making entails a lot of spontaneity. Even when the artist has done everything, how the work turns out in the end is purely at the mercy of time. Just as Su Xiaobai says, “Leave the narrative to whoever wants a narrative. All I ask for is a little light, a little surface and undulation, with a bit of color, a bit of flow.”



拂水——夏
油彩・漆・麻・エマルジョン・木
Breeze Over Water - Summer
Oil, lacquer, linen, emulsion, and wood
2018 | 200×190×18 cm



拂水——秋
油彩・漆・麻・エマルジョン・木
Breeze Over Water - Autumn
Oil, lacquer, linen, emulsion, and wood
2018 | 200×190×18 cm



拂水——冬
油彩・漆・麻・エマルジョン・木
Breeze Over Water - Winter
Oil, lacquer, linen, emulsion, and wood
2018 | 200×190×18 cm

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目1-1
ギャラリー棟3階 10:00 a.m. - 6:00 p.m. / 月曜日 休館
金・土曜日 は 8:00 p.m. まで。ただし 10/19、20、26 を除く。
*入場は閉館30分前まで

レセプション

2018.10.12 | 4:00 p.m.
兵庫県立美術館ギャラリー棟1階 ホワイエ

Hyogo Prefectural Museum of Art

1-1-1 Wakinohama Kaigan-dori, Chuo-ku, Kobe 651-0073 Japan
Venue—Exhibition Gallery of the 3rd Floor, The Gallery Wing
Museum Hours—10:00 a.m.-6:00 p.m. / Closed on Mondays
Fridays and Saturdays 10:00 a.m.—8:00 p.m. (except 10/19, 20, and 26)
*Last admission to the gallery floor is 30 minutes before the closing hour.

Reception

2018.10.12 | 4:00 p.m.
Foyer of 1F, Gallery Wing, Hyogo Prefectural Museum of Art

主催
Organizer

TKG FOUNDATION
FOR ARTS & CULTURE
財団法人 陶芸文化財団

共催
Co-organizer

兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART